

鈴木清風ものしりシート

尾花沢は、江戸時代から交通の要衝で、商業のさかんなまちでした。紅花などの特産品を売り買いすることで、「豪商」と呼ばれるほどの財産を築く人もあらわれました。

そんな豪商の中でも、尾花沢を代表するのが、鈴木清風その人です。鈴木清風は、商人として活躍したほか、文化的な活動も積極的におこない、『おくのほそ道』で知られる俳人・松尾芭蕉とも、交流をもつ人物でした。

■ 鈴木清風は、どういう人？

鈴木清風は、慶安四年(1651年)に、尾花沢で生まれました。清風というのは、のちに名乗った俳号(俳人が名乗る別名)です。

清風が生まれた鈴木家は、この頃金融業(お金を貸したりする商売)を営んでおり、清風の代には多くの商品の取引をおこなっていました。なお、鈴木家は代々「八右衛門」と名乗っていたので、清風は三代目八右衛門にあたります。

また、「残月軒」と名乗り、商人としてだけでなく、文化人としての顔も持つ人物であったことがわかります。



米倉兌画『鈴木清風』

鈴木家ではその先祖を、^{みものよしつね}源義経の家臣であった^{かしん}鈴木三郎重家であるとして
います。その子孫がいつからか尾花沢に住むことになり、江戸時代
に入ると商売をはじめて、尾花沢を代表する豪商に成長しました。

才能に秀でていた清風は、^{ひい}金融や紅花の取り引きなどで成功して、巨
額の富を得ました。

■ 文化人としての清風は、どういう活動をしたの？

鈴木清風は、その商売の関係で、江戸や京都などへたびたび出かけま
した。そこで、いろいろな人と交流を深め、商売のつながりだけでなく、
文化活動でも交友関係を築いていきました。

中でも、清風が好んでたしなんだのが、^{はいかい}俳諧でした。多くの俳人と句会
を開いたりしたほか、自身でも俳諧を集めた本をつくって出版しました。

それが、『^{はいかい}俳諧おくれ^{すごろく}双六』、『^{いなむしろ}稲筵』、『^{はいかいひとつ}俳諧一橋』です。この三作品
は、いずれも清風が30歳代の時につくった俳諧集です。

そして、俳諧を通じて江戸で出会ったのが、松尾芭蕉でした。



宮木薫画『おくの細道 涼しさを我宿にしてねまるなり』

■ 松尾芭蕉と清風のかかわりは？

げんろく
元禄2年(1689年)、松尾芭蕉は江戸をたつて、東北・北陸地方をまわる旅に出ます。その紀行文が、『おくのほそ道』です。

芭蕉が旧友である清風を訪ねて尾花沢にやってきたのは、5月17日(今の暦で7月3日)のことでした。芭蕉は『おくのほそ道』本文の中で、清風のことを「かれは富める者なれども、志いやしからず」と評しています。お金持ちであっても、決していやしい人ではなく、風流を解する文化人であったことがわかります。

芭蕉は、尾花沢に10泊します。「おくのほそ道」の旅では、全日程の4分の1を出羽国で過ごしましたが、その中でももっとも長く滞在したのが尾花沢でした。芭蕉は、鈴木清風の家^{でわのくに}に3泊、養泉寺^{ようせんじ}に7泊しました。

Coffee Break

～ 清風伝説 ～

鈴木清風の人柄を伝えるエピソードとして、次のような伝説が言い伝えられています。

清風は、江戸に大量の紅花を運んで、売りさばこうとしました。その時、江戸の商人たちが、清風の紅花を買わないように結託^{けったく}しました。それに対して、「どうせ買わないのなら」ということで、清風は江戸に運んだ紅花を全て燃やしてしまいました。大量にあった紅花が全部燃えてしまったことで、紅花が品薄な状態になり、値段も翌日から一気に高くなりました。あわてた江戸商人たちの紅花買いあさりが始まり、これを利用して、清風は3万両もの大金を手に入れました。燃やしたのは実は紅花ではなく、カンナ屑^{くず}だったのです。

清風は、こうして儲けたお金を自分のために使うのではなく、遊郭^{ゆうかく}を三日三晩貸しきって、遊女たちを休ませるために使ったといわれています。

■ 養泉寺には何が残っているの？

芭蕉が養泉寺に7泊したのには様々な理由が考えられますが、清風の家は、商売で忙しい時期だったので、周りでバタバタしては、芭蕉がゆっくりと休むことができないだろうという、清風の配慮はいりょがあったと思われます。

また、養泉寺からは、遠くは鳥海山ちょうかいざんをや月山がっさんを望むことができ、眺めながのいい場所でした。芭蕉も雄大な山々ゆうだいを眺めながら、ゆっくりとした時を過ごしたのでしょう。

養泉寺には、芭蕉が詠んだ句よを石きざに刻んだ「句碑」くひ（宝暦12年（1762年）建立）ほうれきがあります。それは「涼塚」すずづかと呼ばれ、人々に親しまれています。

「涼しさを
我が宿にして
ねまるなり」

という句が刻まれています。
ちなみに、「ねまる」というのは、尾花沢の方言で、「くつろいですわる」という意味です。



鈴木清風は、享保6年（1721年）に、71歳で亡くなりました。亡くなる約10年前に書き記した遺言状は、子どもたちに対して、賭け事などをいましめ、手堅い商売をおこなっていくような教てえを盛り込んだ内容となっています。清風の人柄ひとがらがしのべられます。

【参考】もっと詳しく知りたい場合は・・・

芭蕉・清風歴史資料館編『芭蕉と清風』1983年、2006年改訂

『尾花沢市史』上巻 2005年

・・・をご覧ください(悠美館にあるよ☆)